

岡崎久彦著『幣原喜重郎とその時代』PHP文庫、PHP研究所2003年7月18日刊を読む

近代日本の原点であった時代

1. (1)大正デモクラシーについての従来のイメージは必ずしもよくない。明治の自由民権運動以来の努力でやっと大正デモクラシーを達成した政党などは、藩閥、保守勢力から見ればお上の権威に逆らう不忠不孝の輩であり、山県有朋健在のころは政党政治などはもってのほかという考えだった。
 - (2)デモクラシーという言葉に真に正統性が与えられたのは、戦後になってからである。その前は毀誉褒貶が少なくとも半ばする言葉だった。とくにいまでも生きている人の記憶に残っている第二次大戦直前の時代には、軍による革新政治と較べて、デモクラシー政党政治は腐敗墮落の代名詞であった。
 - (3)そして戦後の左傾史観では、大正デモクラシー時代は社会主義運動、労働運動の芽生えがあった時代として評価されるだけで、一部の金持ち特権階級だけがよい目を見て、国民大衆は圧制と貧困に苦しんだ時代のように描かれている。
2. (1)しかし、そういう偏向教科書に書かれたステレオタイプから離れて、読者の方に個人個人の祖父母や曾祖父母の生活について家族の記憶に頼って、「どういう時代だった？」と聞くと、ほとんどの方から、けっこう良い時代だったという返事が返ってくる。悪い記憶を持っている人のほとんどはその後の昭和恐慌のころの記憶のようである。
 - (2)もちろん、ご先祖が共産党か、あるいはその疑いを、もたれた方は違うであろうが、それは日本人の万分の一であろう。
 - (3)戦争直前の時代さえ覚えている人びとが高齢化している現在、大正デモクラシーのことを覚えている人は、百歳を超えて、暁天の星のごとく一つ一つ去って行きつつあるが、それが良い時代だったということについては、まずほとんどの人が異存ないようである。
3. (1)『小村寿太郎とその時代』で、明治の雰囲気をも今に伝えるものとして明治の軍歌を多く引用したが、同じように、あるいはそれ以上に大正時代の雰囲気を現在に伝えてくれるものとしては童謡がある。
 - (2)①兔追いし かの山(「(故郷)」)…… 大正3年
 ②菜の花畑に 入日うすれ(「おぼろ月夜」)…… 大正3年
 ③あした浜辺をさまよえば(「浜辺の歌」)…… 大正7年

④唄を忘れたかなりやは(「かなりや」)……	大正 7 年
⑤お手つないで 野道を行けば(「靴が鳴る」)……	大正 8 年
⑥青い眼をしたお人形は (「青い眼の人形」)……	大正 10 年
⑦夕焼け小焼けの赤とんぼ(「赤とんぼ」)……	大正 10 年
⑧金欄緞子の帯しめながら(「花嫁人形」)……	大正 12 年
⑨月の砂漠をはるばると(「月の砂漠」)……	大正 12 年
⑩夕焼け小焼けで 日が暮れて(「夕焼け小焼け」)……	大正 12 年
⑪しょう しょう 証城寺(「証城寺の狸囃子」)……	大正 13 年

4. (1)これほどに平和と心の安定から生まれ出た歌が他にあるだろうか。戦後半世紀の日本の平和は、これだけの心を打つ叙情的な芸術を生み出していない。大正の平和は、日清、日露戦争に勝ち、日英同盟を結んで、自らの手で築き上げた平和である。そして新たに勃興した中産階級が、国家と社会の安定に自信を持ち、その平和を楽しんだ時代である。
- (2)少女趣味ともいえる。しかし、言い換えれば明治の武士の精神に対して、婦女子の心情を臆面もなく歌い上げたのが大正の精神である。そしてその感傷の裏には、自らの住んでいる社会に対する、揺るぎのない安定感と自信がある。この芸術感覚は、童謡にとどまらず、山田耕作の「からたちの花」などの高度の芸術的歌曲を創り出しているのである。
- (3)植民地時代を知っている、今は消え去りつつある世代の韓国や台湾の人々が、郷愁をもって日本時代を懐かしむ際、何よりも思い出すのは、この大正時代の歌曲である。
- (4)日本の文明は、明治の愛国主義と同じように、大正時代にも、日本人が誇りをもって回帰することのできるもう一つの精神的原点を持っているのである。
5. (1)むしろ私は、大正デモクラシーが近代日本の政治、社会の原点であると思っている。それは明治維新以来、日本人が自らの手によってつくりあげた一つの飽和点であったからである。
- (2)軍人は、日清、日露の戦いを勝ち抜き、国家の干城であるという誇りをもって、外交官は、日英同盟のもとに日本の安全と繁栄を盤石の基礎のうえに導いた自負があった。そして経済官庁も財界も民間も、明治以来の近代化は自らの手で成し遂げたという自信があった。
- (3)そして政党は、明治の自由党以来、何十年もの藩閥との苦闘の結果として、ついに政党政治を達成し、軍人、官僚のうえにあって日本における権力の頂点に立っていた。
- (4)つまり、それぞれが自らの血と汗で築いた自分のものをもって、それが政党政治の優越のもとに、チェック・アンド・バランスが機能していた時代であったのである。
- (5)近代化の完成の自信のもとに、明治以来の日本の見直しも自由に行われた。歌曲のところで「臆面もなく」という表現を使ったが、明治の世代に反逆して自由主義、民主主義、社会主義などという言葉が「臆面もなく」使われたのがこの時代である。

6. (1)それが崩れたのである。幣原の退陣は、そのもっとも象徴的なできごとだった。しかし、崩れたとはいえ、近代日本の歴史のなかで原点として回帰できる場所があるとすれば、それは明治以来の日本の近代化が一つの頂点に達した大正デモクラシーの時代なのであろう。
- (2)ライシャワーの自伝によれば、ライシャワーは占領当局に大正デモクラシーの復活を進言し、それが容れられたのが、戦後の日本のデモクラシーのもとだという。
- (3)やはり無から有は生じない。明治時代以来、半世紀のあいだ営々として築いた伝統があり、そこに復帰したからこそ日本の現在のデモクラシーが、どんなにデモクラシーに固有の欠点を非難されようとも、体制自体はビクともしない強靱さをもっているであろう。

P449 ~ 454

<コメント>

「大正デモクラシー」とは何かについての外交官、岡崎久彦大使の見識は、的を得て参考になる。日本のデモクラシーの原点は「大正デモクラシー」にあると考え、日本におけるデモクラシーのあり方を考えるときの参考にしたい。また、現代日本外交の基本である国際協調主義も、実は大正デモクラシーに含まれていたと私は考える。

2019年10月27日(月)